
夜明け前

傘月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明け前

【Nコード】

N1806N

【作者名】

傘月

【あらすじ】

人魚になりたいと願い死んだ祖母を弔う話です。

お題サイト「capriccio」(<http://noir.sub.jp/cpr/>)から「狂詩曲 第一番」のお題をお借りしました。

今回は「01・夜明け前」になります。

「夜明け前」

祖母が、昔人魚を見たという話をしてくれたことがある。夜明け前の波打ち際で、魚の下半身を幽雅にくねらせ、ゆつくりと明るくなつていく空と海を眺めていたそうだ。尾鰭がきらびやかでとても綺麗で、祖母は『あんなに綺麗なら、私は生まれ変わったら人魚になりたいわ』と言っていた。

そんな祖母が昨日、亡くなった。2年前に脳梗塞で倒れて半身麻痺と言語障害を煩った祖母は、特別老人ホームに入所させられた。何回か見舞いに行ったが、自由のきかない体に苛立ち、あうあうと奇声を発しながらうつろな目で俺を見るその姿は、俺の知っている祖母では無くなっていた。

俺の知っている祖母は脳梗塞で倒れた地点で亡くなった。俺は祖母との思い出が踏みにじられるのが嫌で、いずれ近いうちに死んでしまつたろうと解りつつも祖母を避け続けた。

だから知らなかった。祖母が、あんなに細く小さな体になつてしまったことを。

祖母の遺体を見ると、特に動けなかったからなのか下半身の衰えが顕著で、小さく細くまとまつた下半身は、まるで人間のものと思えなかった。それは、そのまま鱗と尾鰭をつけば魚になりそうな形だった。上半身は多少衰えが見られるが人間で、下半身は魚。それを見てふと人魚を連想し、俺は祖母が人魚に生まれ変わりたいと言っていたことを思い出した。人魚になるにはどうすればいいのだろう。白い布を顔にかぶせられた祖母を見ながら考えた。そうか、海だ。海に流せばきっと人魚になれる。

迷いは無かった。夜、線香の火を守る番を買って出た俺は、深夜、誰にも気付かれないように祖母を運び出した。その体はとても軽く、その肌の感触はかさかさしていたが、とても懐かしく、昔祖母と一緒に手をつないで歩いた浅草寺の仲見世通りを思い出した。子供ながらに祖母に無駄にお金を使わせるのは悪いと思うのと、祖母と歩いているのがちよつと恥ずかしかつた俺は、あれこれ食べ物やお土産を買ってやろう買ってやろうと勧めてくれる祖母の誘いを全て断った。あのとき、きつと祖母が死んだらこの日を後悔するだろうとなんとなく気付いていた。それでもそうした。そして俺は祖母を自分の車の後部座席に乗せ、泣きながら後悔をしていた。思い出ても恥もかなくなり捨てて祖母に甘えなかった、顔も見せず避け続けた自分に後悔した。だからこれからすることは、最後の祖母孝行だ。

ここから海までは車で30分ぐらい。運転中、さっきの思い出が呼び水になり、まるで走馬燈のように祖母との思い出がいろいろと流れていった。一緒にうどんを作ったこと。近くの土手で散歩したこと。その散歩中、ハトに餌をやったこと。祖母は100まで生きるといつも胸を張って言っていたこと。涙で、前が見えなくなりそうだからできるだけ溢れる思考に蓋をしようと必死になったが、一度決壊したものに蓋をするのはなかなか困難で、ハンカチで涙をぬぐいながらなんとか視界を確保しつつ、海に向かった。途中、どうしても耐えられなくなったら、路肩に駐車して出てくる涙と思い出を好きなように暴れさせ、ゆっくりゆっくり海まで向かった。後部座席で毛布にくるまれ倒したシートの上に寝転んでいる祖母は、しんとしていた。

そんなのだから海についたときは出発から一時間半近く過ぎていた。太平洋側だから、日の出は見られない。それでも背後からゆっくりと朝が近づいてきているのが解った。振り返ると、遠くの山のほうの空が白み始めていた。

少し考えて、やはり故人を見送るのだから喪服は脱いだら失礼だろうということで、靴と靴下だけ脱いで、黒いスーツはそのまま、祖母を抱えて波打ち際まで歩く。この海も、祖母との思い出の場所だ。幼い頃は季節問わず波打ち際で遊び、ある程度成長すると土手と同じようにここでも散歩をした。

波打ち際からゆっくりと歩を進め海に入る。服が水を吸って重たく、自分が溺れないように俺は細心の注意を払いつつゆっくりと進んだ。真夏でも夜明けの海水はさすがにつめたかったが、それぐらいは我慢した。

胸の下あたりまで水がくるところまで歩き、ここらが溺れず進める限界と悟り、俺は腕の中で眠る祖母の顔をもう一度見た。安らかな寝顔だった。ゆらゆらとたゆたう波が祖母をぬらす。祖母の亡骸のその細い足を見て、俺は、もしかしたら人魚というのは、昔、足に障害を持って生まれた子供や、後天的に足に障害を負ってしまい亡くなった者が海に流され、海で生活するために進化した姿なのかという考えがよぎった。晩年、自分の思い通りに動けず苛立ち生きることがきつときつととても辛かったであろう祖母が、この大海原で人魚となって自由に生活してほしいと、俺は切に願った。

そつと腕を放し、祖母は海に沈んでいった。あとは波が祖母をしかるべき場所へ連れて行ってくれるだろう。ゆっくりと沈んでいく祖母は、最後に俺に微笑みかけてくれた気がした。ありがとう、と聞こえた気がした。俺は祖母に「さよなら」と告げて、岸に打ち上げたら承知しねえぞ、と水平線を睨んだ。

少し遠くで、いままで見たこと無いようなきらびやかな魚の尾鰭が、スルンと海から出てきたのが見えた気がした。

（後書き）

初投稿。

祖母が死んで、だいぶ経ちました。

ちよつとだけノンフィクション。だけどフィクション。もう時効です

感想をいただき、改行をもう少ししたほうがいいとの指摘を受け
ましたので、軽く改行を入れました。

ふらじやいる様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1806n/>

夜明け前

2010年10月10日18時26分発行